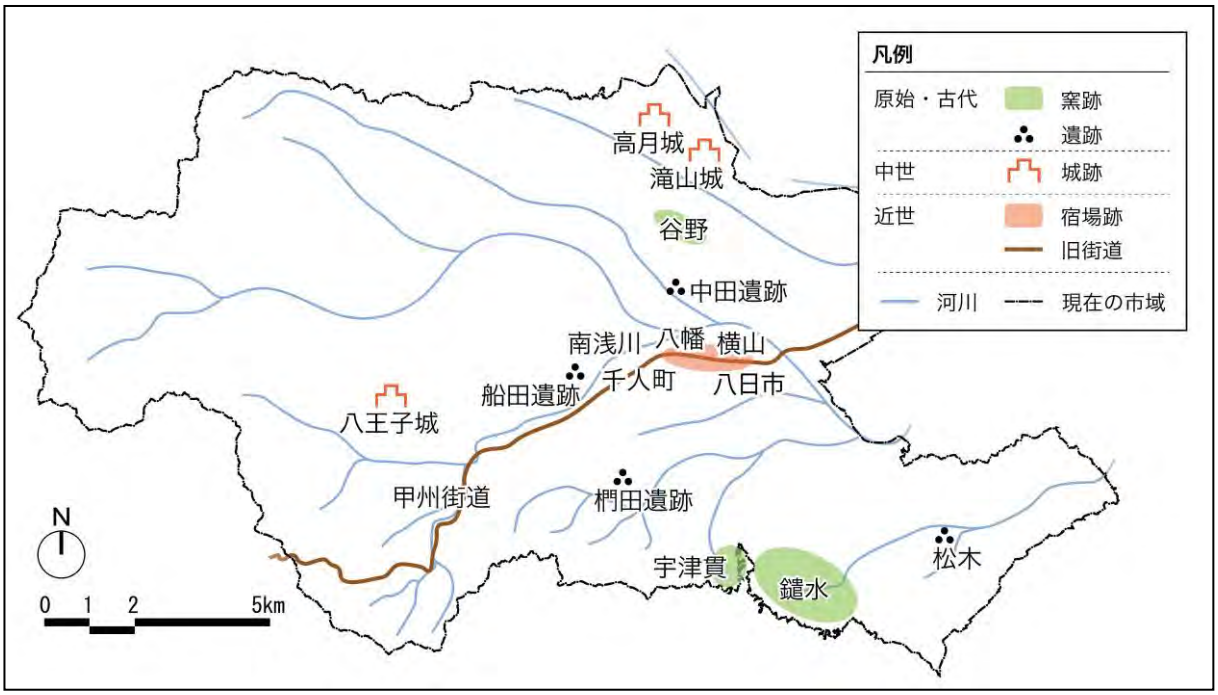
【中世】

平安時代には、武蔵国分寺の瓦等を焼いた窯跡が鑓水、宇津貫、谷野の谷戸に見られ、また由井牧、石川牧等の勅旨牧では都へ上納される馬が生産されていた。また多摩丘陵の開発も進められ、平安末期には摂関家領の船木田荘という荘園が置かれた。

鎌倉時代には、武蔵七党の横山党の発展が著しく、源頼朝の鎌倉幕府創設にも大きく貢献している。その後、横山党は建暦 3（1213）年の和田義盛の乱に連座して滅亡し、横山党の旧領は鎌倉幕府の有力御家人の大江広元に与えられ、その後、広元の子孫である長井氏に伝えられていった。室町時代になると、関東管領山内上杉（やまのうちうえすぎ）氏に仕えて武蔵守護代を務めた大石氏が長井氏滅亡後にこの地に進出した。『大石系図』によれば長禄 2（1458）年には大石顕重（あきしげ）が高月城を築いて支配を進め、63 年後の大永元（1546）年には大石定重（さだしげ）が本拠を滝山城に移したという。この頃、滝山城下に八幡、八日市、横山の三宿が成立した。一方、その頃から武蔵に進出してきた北条氏は、関東管領山内上杉氏や扇谷（おうぎがやつ）上杉氏と覇権を争ったが、天文 15（1546）年の河越合戦で北条氏康が勝利すると、上杉氏の配下にあった大石氏は北条氏に服属した。そして大石氏の当主綱周（つなちか）は、氏康の三男氏照を養子に迎え、家督を譲って隠居した。こうして大石領を継承して滝山城に入城した氏照は、永禄 4 年（1561）に青梅の三田氏を滅ぼして支配領域を拡大、同 12（1569）年の武田信玄・勝頼父子との滝山城攻防戦を経て、天正 10（1582）年頃には本拠を滝山城から新たに城山に築いた八王子城に移し、城下三宿と共に移転したのである。氏照は、この城内の土地に伝わる牛頭天王「八王子権現」を守護神として祀った。このことから城名、城下および、城主の勢力のおよぶ範囲を「八王子」と呼ぶようになったといわれる。しかし、天正 18（1590）年 6 月 23 日豊臣秀吉の命を受けた前田利家、上杉景勝両軍の猛攻を受け落城した。この戦の後、同年 7 月 5 日小田原の本城は降伏し、同月 11 日には氏政、氏照が自刃し、当主氏直が高野山に配流となり戦国大名北条氏は滅亡した。



▲図表 18　主要な遺跡等の位置

【近世】

北条氏滅亡後、八王子を含む関八州は徳川家康の領地となった。天正 18（1590）年 8 月 1 日に江戸城に入城した家康は、旧八王子城下の治安維持のために代官頭大久保長安に武田の旧臣の小人組 250 人を預けて派遣した。治安維持に当たった彼らは、翌年 250 人が追加され 500 人となり、4 年後の文禄 2（1594）には、南浅川沿いの現在の千人町に新たに家屋敷が与えられた。その後、慶長 5（1600）年頃にはさらに 500 人が追加されて合計千人となり、八王子千人同心が成立した。またこの頃、横山・八日市・八幡の三宿が八王子城下から、現在の甲州街道沿いに移され、大久保長安の指揮のもと、町づくりが行われた。移転した三宿は甲州街道の宿場町として発展するとともに、月六回の市には織物をはじめとする多くの物資の取引が盛んに行われた。こうして八王子は江戸時代を通じて交通・交易の中心として発展し、今日の本市の基礎を確立した。

【近代・現代】

江戸幕府の崩壊により、新たな中央集権体制の政治を行うことにより、日本は近代国家への道を歩み始めた。そして、明治 22（1889）年に市町村制が施行されると、八王子横山十五宿に千人町を加えた地域が神奈川県南多摩郡八王子町となり、商業、織物の町として発展していった。明治 26（1893）年 4 月 1 日三多摩は東京府に移管され、八王子町も神奈川県から離れた。

大正元（1912）年に地名の改廃と地番の改正を行い、次いで大正 6（1917）年には字を廃して町に改めた。同年 9 月 1 日市制を施行し、八王子市が誕生、10 月 1 日を市制記念日と定めた。八王子市は東京府下において東京市に次いで市制を施行した市であり、また最大の市としての基礎を確立した。

その後、昭和 16（1941）年に隣接の小宮町を合併して市域の拡張を図り、昭和 18（1943）年 7 月には、大都市の確立を目的として東京府を廃して東京都が制定された。このことにより現在の東京都八王子市となった。

戦後、昭和 28（1953）年 9 月に公布された市町村合併促進法によって、昭和 30（1955）年 4 月 1 日に隣接の加住、川口、恩方、元八王子、横山、由井の 6 村を合併、昭和 34（1959）年 4 月 1 日に浅川町を合併し、さらに昭和 39（1964）年 9 月 1 日に由木村を合併して、現在の市域が確立され今日に至っている。

イ　八王子城築の歴史

【城主氏照を生んだ北条氏の歴史】

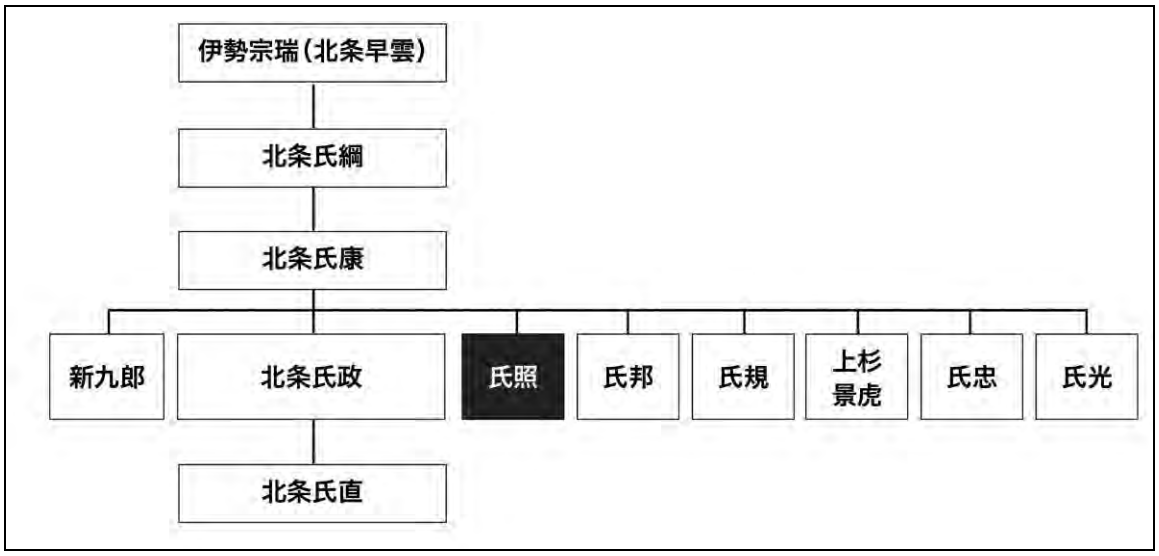
戦国大名の典型とされる北条早雲以下、氏綱－氏康－氏政－氏直、と五代約 100 年の間、小田原を本拠に活躍した北条一族（図表 19）は、鎌倉時代に執権を歴任した北条氏とは直接血のつながりのないことから、「後北条氏」あるいは「小田原北条氏」と呼ばれ区別されている（本計画では、北条氏として記載）。初代早雲は、伊勢新九郎盛時、入道して早雲庵宗瑞（そうずい）と称しているが、没するまで北条とは名乗らず、その子である氏綱から北条を名乗るようになった。この北条への改姓は、新興勢力として相模から武蔵へと領国の拡大を図る伊勢氏が、関東管領山内上杉氏らの従来の勢力に対抗するため、関東ではなじみのない伊勢姓から鎌倉

幕府執権として知られた北条姓に改めたとされている。

北条氏の二代氏綱は、積極的に武蔵へ進出、大永 4（1524）年に扇谷上杉氏の居城である江戸城を攻撃、さらに天文 6（1537）年には河越城を占拠して、両城を南武蔵の支配の拠点とした。一方、巻き返しを図る山内（やまのうち）・扇谷上杉氏は、河越城奪還を目指し大軍を率いて城を包囲した。これに対して家督をついだ三代氏康は、わずかな軍勢で救援に向かい、両上杉氏に大勝した。天文 15（1546）年に起きたこの合戦を一般的には河越夜戦と呼ぶが、夜戦であったかどうか確かではない。しかし、この戦いによって扇谷上杉氏は滅亡し、武蔵の大半が北条氏の勢力下に入った。以後北条氏の勢力は北関東にも伸展し、やがて天文 21（1552）年に山内上杉憲政が越後へと逃走すると、山内上杉氏の勢力も関東から一掃された。

当時多摩郡から入間郡、新座郡にかけての地域は、その山内上杉氏の重臣で、武蔵守護代を務めたこともある大石氏の支配領域であった。しかし、両上杉氏の勢力が後退していく中で大石氏の当主綱周は、北条氏康の支配を受け入れ、氏康の三男である氏照を養子に迎えた。

八王子城を築いた北条氏照の生まれた年は、天文 10（1541）年頃とされ、豊臣秀吉や徳川家康と同世代の人物である。幼名を藤菊丸（ふじきくまる）、大石氏の名跡をついでからは大石源三と称した。その後、北条姓に復した氏照は、天正 4（1576）年には陸奥守（むつのかみ）を名乗っている。



▲図表 19　北条氏略系図　　【出典：『平成 24 年度特別展八王子城』を基に作製】

北条氏照の滝山城入城の時期については、発給文書の年代から永禄 2（1559）年頃と推定されている。氏照は大石姓を継承すると、滝山領内に通用する「如意成就」という印判を捺した朱印状を発給し、領国支配を進めていった。

一方、越後の長尾景虎（後の上杉謙信）は、敗走して来た山内上杉憲政から上杉氏の家名と関東管領職を譲られ、それを大義名分として永禄 3（1560）年 9 月に関東へ出陣した。これに呼応して反北条方の関東諸将は次々と景虎の下に参陣し、勢いを得た越後勢は小田原城下にまで迫った。さらに景虎は、鎌倉の鶴岡八幡宮において関東管領任官の拝賀を行い、上杉政虎と改名している。しかし、政虎は 6 月の終わりごろ、越後に帰国してしまう。上杉軍の帰国後、氏康は敵対する関東諸将の攻略を開始する。永禄 4（1561）年 6 月ごろより氏照とともに、青梅の勝沼城主三田綱定を攻め、同年 9 月までに滅ぼし、多摩郡北部から高麗郡

▲図表 20　北条氏照発給文書に関係する城の配置図

【出典：『八王子城主 北条氏照文書展』（埼玉県立文書館）を基に作成】

一帯に広がる三田氏の旧領と家臣団は、氏照に与えられた。

北関東へと勢力を拡大する氏康は、古河公方足利氏に属していた野田氏から栗橋城を接収、永禄 11（1568）年ごろ、栗橋城主として北条氏照を配置した。栗橋城は、武蔵・下総国境地帯の重要な軍事拠点であり、この城を北条氏が確保したことで、古河公方勢力圏に対する支配権は飛躍的に増大した。これ以前から北条氏は古河公方と婚姻関係を結んで御一家化を進め、その権威を最大限に利用していたが、氏照は古河公方足利義氏の後見役として、より一層重要な役割を担って古河周辺の地域支配を進め、さらに下野方面進出の責任者となっていった。

一方、同年 12 月、甲斐の武田信玄は長年にわたる同盟を一方的に破棄して駿河へと侵攻し、駿府城から今川氏真を追放した。これによって、駿河・甲斐・相模の三国同盟は破れ、駿河国の支配権をめぐって北条氏と武田氏は抗争を開始する。そこで、氏康は武田氏に対抗するため仇敵の上杉謙信と講和し、永禄 12（1569）年 6 月に軍事同盟を結ぶことになる。この同盟交渉には氏照も積極的に関与し、同盟成立後には謙信から謝礼として太刀が贈られている。この越相同盟では成立の条件として氏康の子である三郎が人質として越後に赴き、謙

信の養子となって上杉景虎と改名した。

上杉氏との同盟は武田氏との関係を悪化させた。永禄 12（1569）年 10 月、武田信玄は小田原城を攻撃するが、その途中氏照の籠もる滝山城を攻めたてた。小仏峠を越えて乱入した武田軍別働隊の小山田勢に対し、氏照軍は廿里に出撃して敗れ、さらに信玄本隊による滝山城への攻撃によって二の丸側まで追い込まれたとされる。一説には、この信玄の滝山攻めの経験が、氏照に八王子城築城を決意させたとされている。

【八王子城築城までの動き】

八王子城築城の時期については、『八王子市史』等によれば、主として（１）元亀～天正の初め（1570～1573 年ごろ）、（２）天正 6（1578）年前後、（３）落城に近いころの三説がある。

現在では、天正 10（1582）年以降とする説が有力である。おそらく本格的な築城工事は、天正 12（1584）年ごろから開始されたと考えられる。

礎石建物跡や敷石通路、庭園などが検出された御主殿跡では、重複した遺構の存在はなく、一時期に造営されたことが明らかである。

一方、根小屋エリア付近の調査では、堀と重複して、その上に腰曲輪が造成されており、二期にわたって遺構が構築されていることが判明している。天正 6（1578）年の頃、高尾山を「八王子御根小屋」と呼んでいたことなどから、本格的な築城以前になんらかの城郭遺構が存在していた可能性も指摘されている。

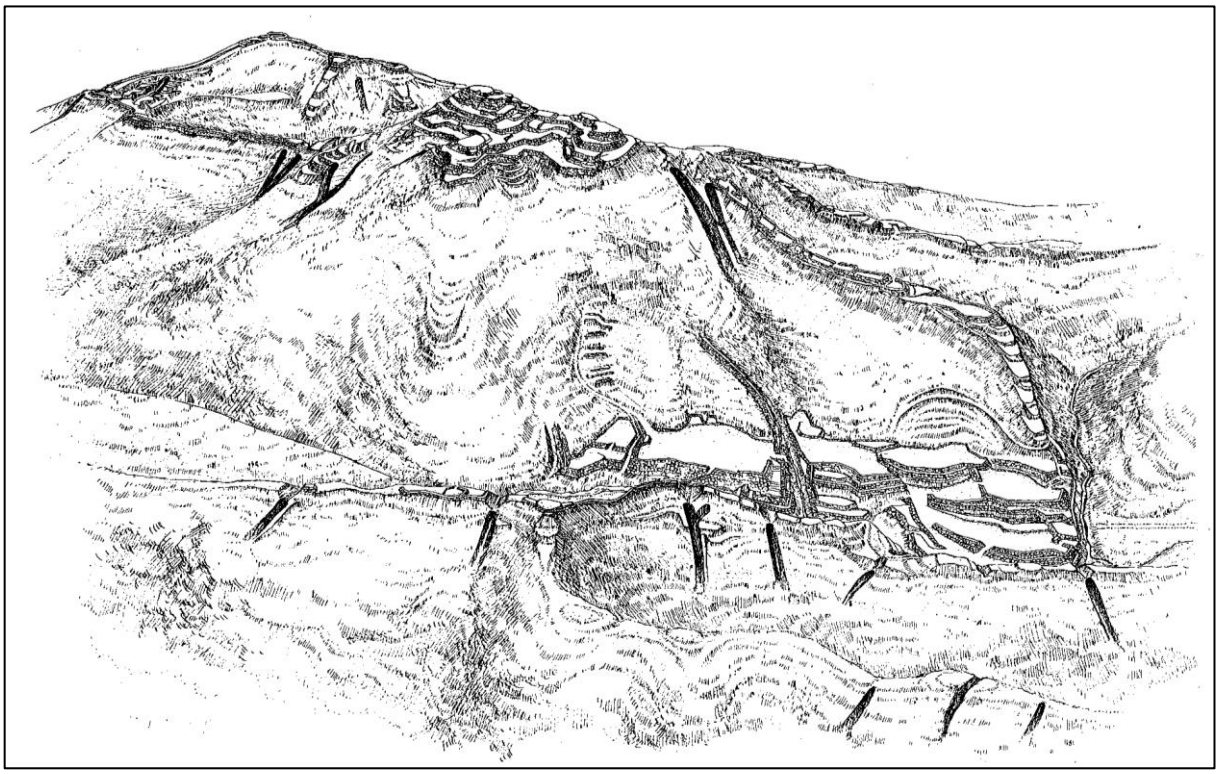
八王子城への移転の時期については、氏照文書の文言の検討からその本拠が滝山から八王子に変わる天正 12（1584）年から天正 15（1587）年の間と考えられる。

なお、氏照は八王子城築城と合わせて、この城内に土地に伝わる牛頭天王「八王子権現」を守護神として祀った。このことから城名、城下および、城主の勢力のおよぶ範囲を「八王子」と呼ぶようになったと言われる。

八王子城築城前後の歴史の動きをみると、元亀 2（1571）年に北条氏康が死去すると、翌年その子である氏政は、あまり効果のなかった越後上杉氏との同盟を破棄して再び武田信玄と講和した。これによって上杉謙信と抗争が再燃し、その後、度々謙信は北関東へ出兵するようになった。しかし、天正元（1573）年に武田信玄、同 6（1578）年に上杉謙信が相次いで死去すると状況が一変する。すなわち信玄の子である勝頼と謙信の養子である景勝が同盟し、北条方と敵対するに至ったのである。そこで、北条氏は新たな外交策として、織田信長に接近する。氏照は天正 8（1580）年に、間宮綱信を信長のもとに遣わし、当主氏政の使者と共に「北条家は織田家との縁組が成立すれば信長に服属しても良い」と申し入れている。この時綱信は完成間もない安土城を実見し、それが後の八王子築城に影響したともいわれている。天正 10（1582）年 3 月織田信長によって武田氏が滅亡、いよいよ信長の脅威が関東に迫ってきたが、同年 6 月その信長も本能寺の変で自害し、12 月には北条氏が推戴（すいたい）してきた古河公方足利義氏が死去した。この様に大きく歴史が変換する中で、領国防衛の充実が図られ、特に甲武国境の防衛強化を目的として、八王子城が築城されていったと考えられる。

【八王子城落城までの動き】

天正 14（1586）年に徳川家康は、敵対していた豊臣秀吉に臣従した。当時北条家の外交を担当していた氏照は、家康との同盟を維持すると共に、反豊臣政権の意思を固めて奥州の伊達政宗との同盟を目指していた。またその一方で氏照は、秀吉との合戦を想定して天正 15（1587）年から天正 16（1588）年にかけて家臣や職人から人質をとり、小田原城・八王子城をはじめ領内各地の城郭の修築を命じ、寺社の梵鐘の供出を求めたりするなど、豊臣政権の来攻に備え決戦体制を固めていった。こうした緊張状態が続くなか、天正 17（1589）年 10 月に上野国周辺は北条氏と真田氏の境界領域として争奪戦が激化していたため、秀吉は真田氏の申し入れを受けて、沼田領を北条方とするが名胡桃（なぐるみ）周辺は真田領とするという裁定を下して停戦（惣無事）を命令した。しかし、同年 11 月、沼田城代 猪俣邦憲（北条氏邦重臣）は名胡桃城を攻略してしまった。この行為は秀吉が命じた惣無事に背くものであった。こうして同年同月、秀吉は北条氏政・氏直父子に宣戦布告状を発し、諸大名に小田原出陣を命じた。天正 18（1590）年 3 月には秀吉自ら大軍を率いて京都を発ち、駿河沼津を発した秀吉の大軍は伊豆・相模国境箱根山中の山中城を落とし、4 月には早くも小田原城を包囲するとともに、石垣山に城を築いて本陣とした。一方、北条方は氏照や北条氏房、佐野氏忠などが、精鋭部隊を率いて小田原城内に籠城した。八王子城には重臣の横地監物・中山勘解由等が籠城していたが、6 日 23 日に秀吉配下の前田利家、上杉景勝等の率いる大軍が八王子城へ押し寄せ、激戦の末一日で落城した。秀吉の指示による前田・上杉両軍の自軍の被害も顧みない力攻めは、北条氏の重鎮氏照の本城を陥落させることで、北条氏の戦意を失わせるためであった。実際、八王子城の落城は小田原城籠城中の諸将に衝撃を与え、北条方の当主氏直に降伏を決意させた。こうして 7 月 6 日に小田原城は開城し、秀吉から主戦論者とみなされた氏



▲図表 21　八王子城推定復元俯瞰図（南東から見る）　【出典：東京都の中世城館】

政・氏照兄弟、および豊臣方に寝返った大道寺政繁、松田憲秀の 4 人は切腹を命じられた。なお、氏直は降伏を申し出たことと家康の娘婿であったことから助命され、高野山に蟄居（ちっきょ）となった。7 月 11 日に氏政・氏照兄弟は、小田原城下にあった医師の田村安栖の屋敷で切腹、ここに 100 年間続いた北条氏は滅亡した。北条氏の旧領は、豊臣秀吉の国替え命令によって、徳川家康に与えられ、八王子を含めた多摩地域は家康が領有することとなった。

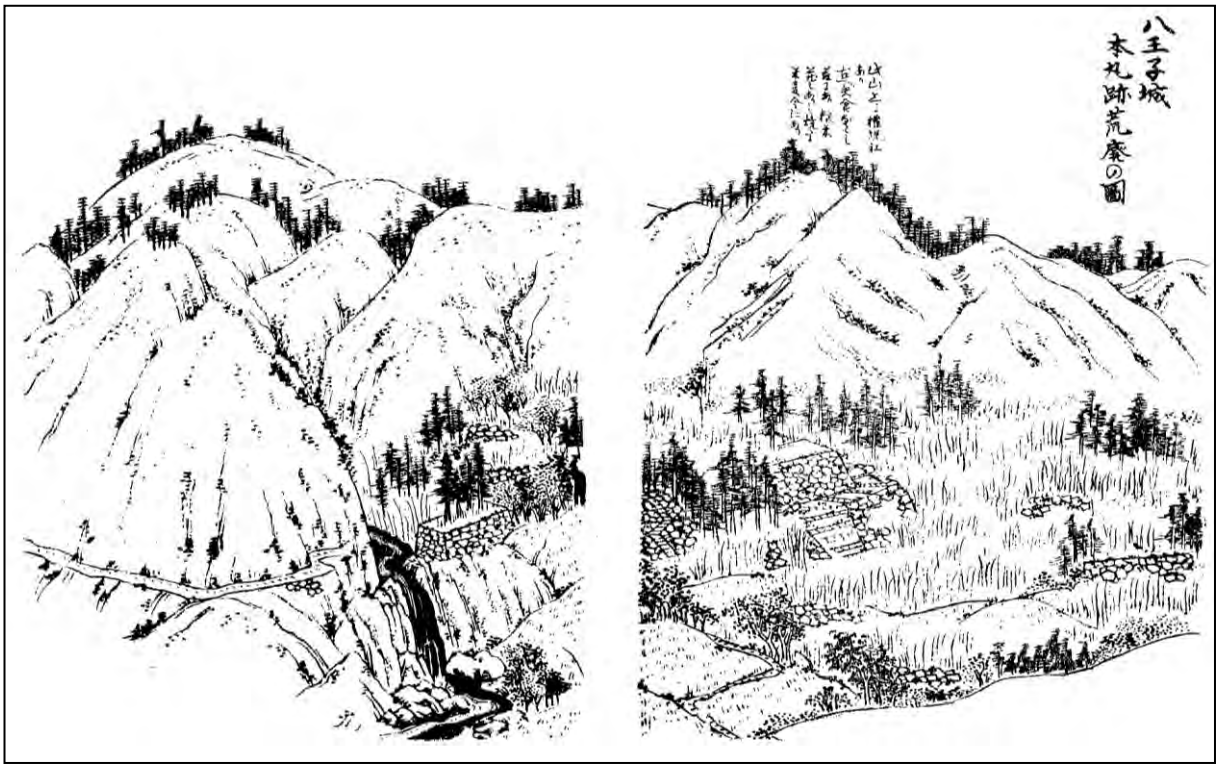
【八王子城落城後の動き】

天正 18（1590）年 6 月豊臣秀吉軍に攻められ八王子城は落城し、この地は徳川家康の領地となった。さらに江戸幕府成立後は幕府の直轄領になり、「御林」として設定され事実上の立ち入り禁止区域となった。また、弘化 3（1846）年～嘉永 5（1852）年の頃、幕府の代官である江川太郎左衛門英龍は、八王子地方に植林事業を実施した。この時、城下曲輪部分に林道を開通させ、遺構を著しく破壊したと伝えられている（図表 23）。

江戸時代後期、多摩郡の名所・旧跡を挿絵入りでまとめられた地誌『武蔵名勝図会』（図表 22）には、落城後の八王子城の本丸や御主殿跡を描いた挿絵があり、これによると御主殿の場所には石垣を残しつつ跡地に樹木や雑草などが生えている様子が描かれている。

このように、幕府の御林となった八王子城跡は植林事業が実施され、森林として明治期を迎える。

明治期以降、南西部は国有林、東北は社寺及び一部が民有地に解放された。明治 38（1904）年の頃、日露戦争による木材需要が高まったことにより、城山の御林を伐り出すために城山の登山口の道が開かれた（図表 23、24）。



▲図表 22　落城後の八王子城本丸跡、御主殿跡の様子　　【出典：武蔵名勝図会】

また、明治 25（1891）年、宗関寺が現在の地に移され、大正時代になると宗関寺より以西の現在の道が開かれた。この道は昭和 31（1956）年頃のキャンプ場の開設に伴い、道路が拡張された（図表 23、24）。

八王子城跡における昭和以降の大きな開発行為は、昭和の初めの福善寺大悲閣の建立、昭和 40（1965）年より工事が開始された東京造形大学の建設、昭和 43（1968）年より工事が開始された都立八王子霊園、昭和 37（1942）年より工事が開始された中央自動車道、平成 19（2007）年より工事が開始された圏央道などがある。

福善寺大悲閣については、現在もアシダ曲輪に建物が残っており、また石仏などの石像がアシダ曲輪の色々な場所に点在している。

東京造形大学の建設にあたっては、昭和 40（1965）年 11 月に運動場の造成が開始され、昭和 43（1968）年及び昭和 50（1975）年に増築工事が開始された。

都立八王子霊園の建設にあたっては、昭和 30（1955）年の八王子市合併後に、旧元八王子村の所有の土地を東京都へ売却し、昭和 43（1968）年 3 月に八王子霊園についての伺書により地元の意見が諮問され、同年 4 月以降に工事が開始され、昭和 46（1971）年 4 月に霊園が開設された（図表 23、27）。

中央自動車道の建設にあたっては、昭和 37（1942）年より工事が開始され、昭和 42（1967）年 12 月に調布と八王子の間が開通し、翌年の昭和 43（1968）年 12 月に八王子と相模原の間が開通した（図表 23、26）。

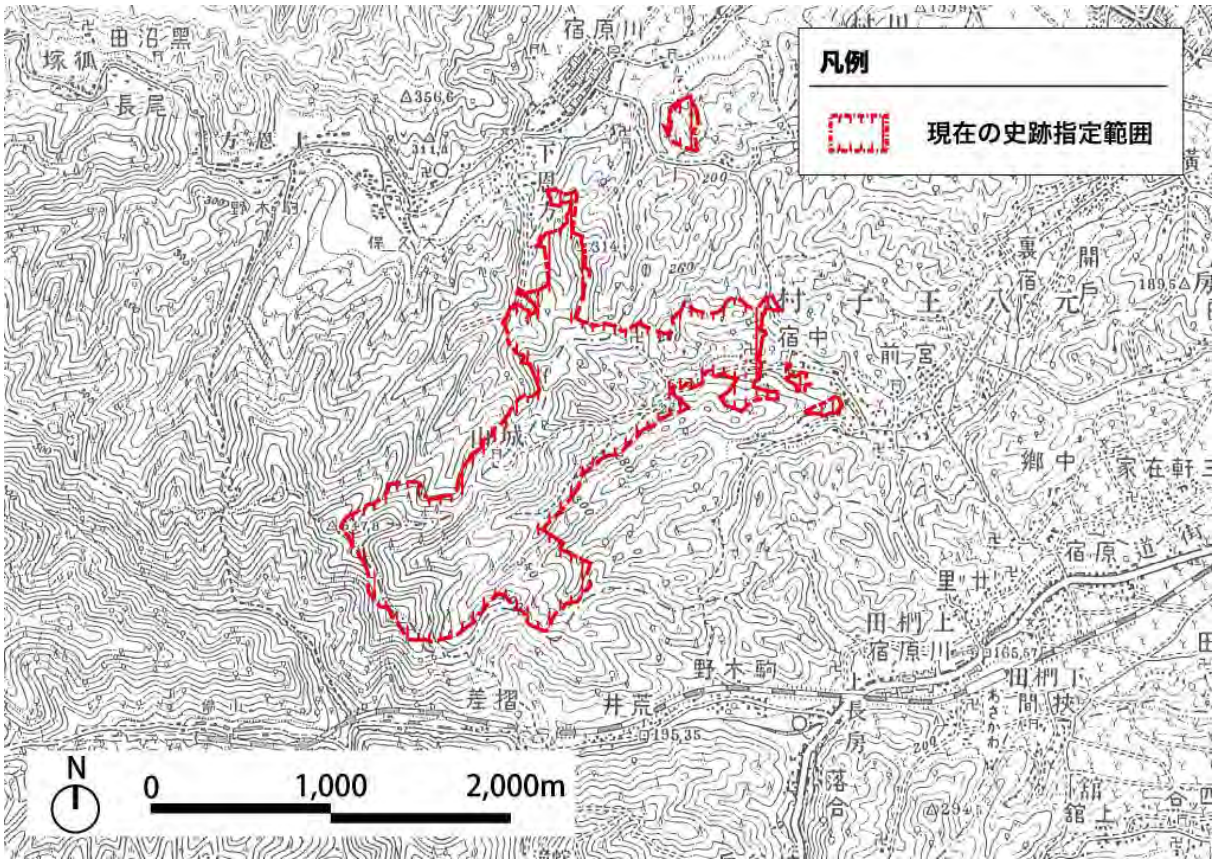
また、圏央道の建設にあたっては、八王子城跡トンネル掘削工事が平成 15（2003）年 11 月より先進導坑掘削に始まり、平成 19（2007）年 6 月に工事が完了し、中央自動車道と接続した（図表 23）。

東京造形大学は、本市宇津貫への移転に伴い平成 4～7（1992～1995）年に大学施設は解体された。平成 23（2012）年に、東京造形大学 4 号館跡地に八王子城跡ガイダンス施設建設の工事が始まり、翌年の平成 24（2013）年 10 月 20 日に開館した。

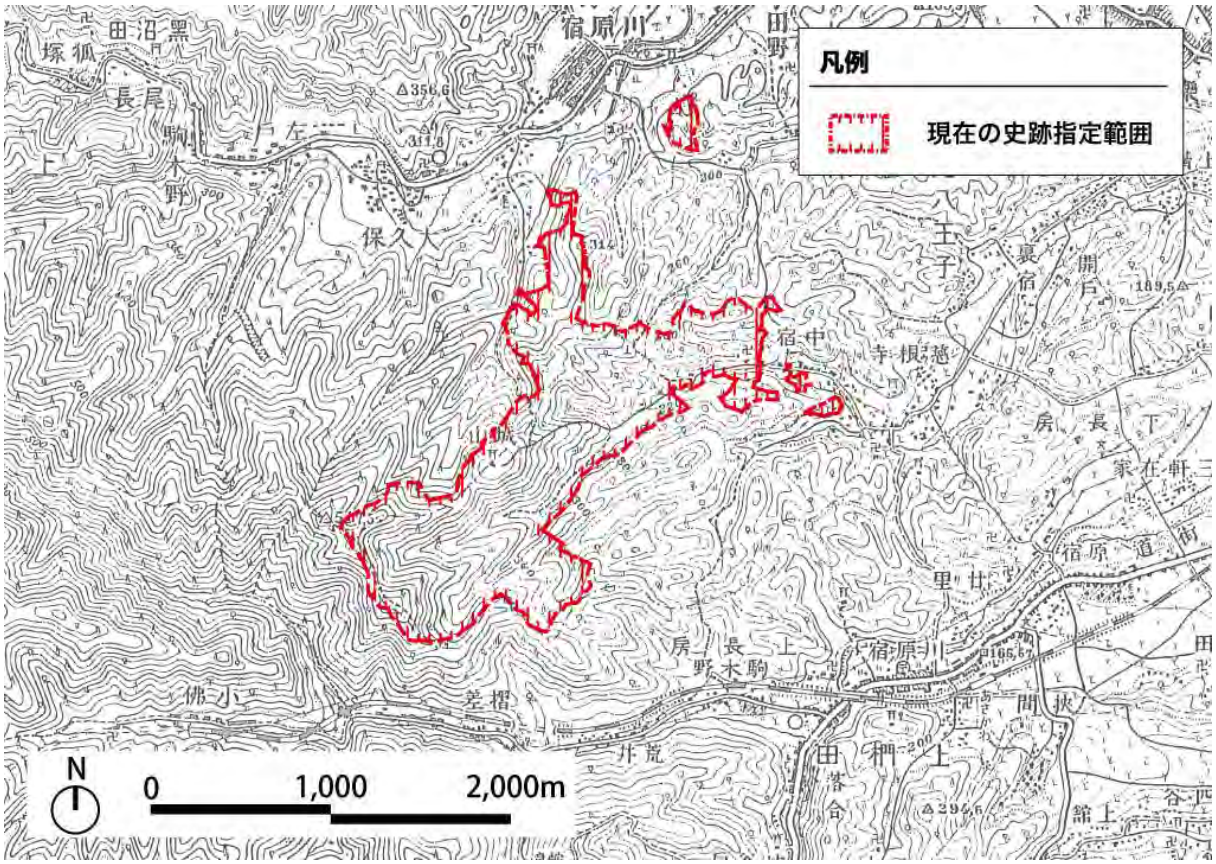
このような状況を経て、八王子城跡は今日に至っている。

▼図表 23　八王子城落城後の変遷

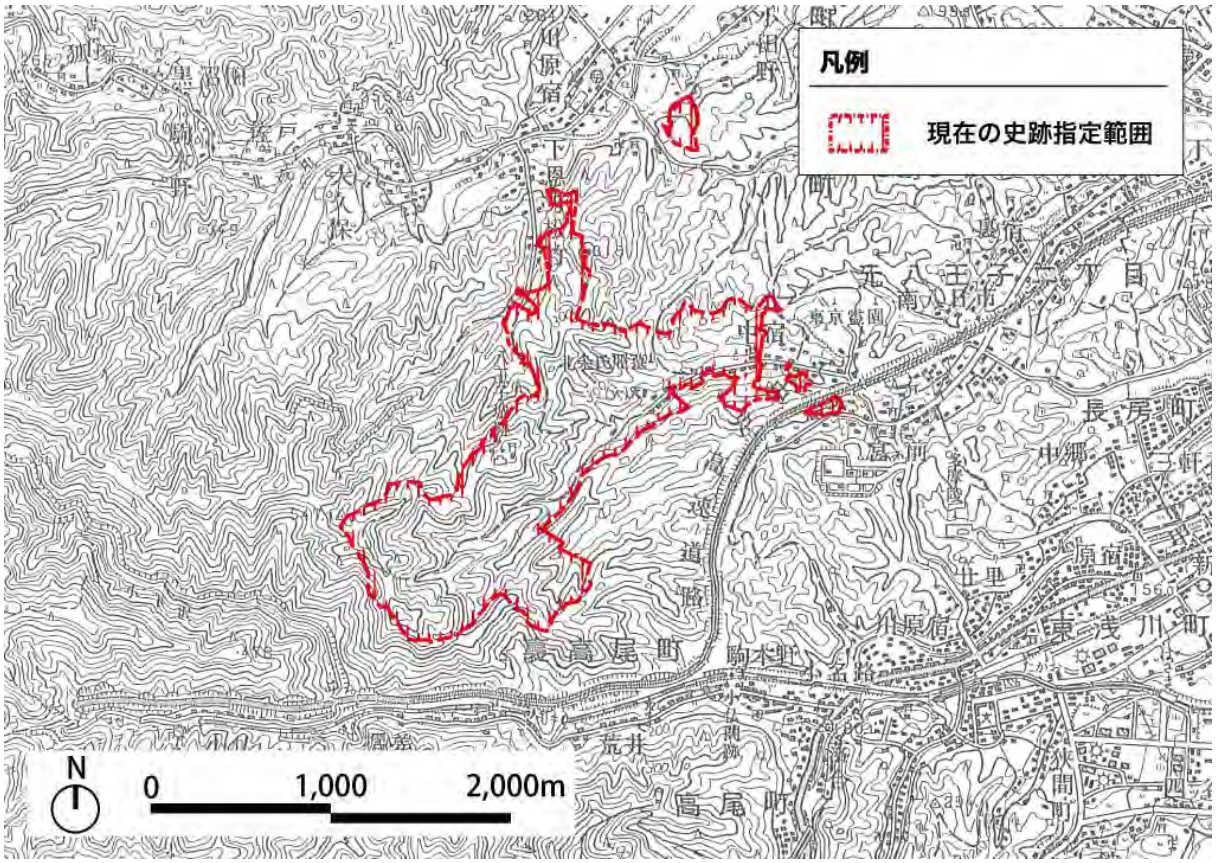
年代		主な出来事
安土桃山	天正 18（1590）年 6 月 23 日	八王子城が落城する。
	天正 19（1591）年	牛頭山宗関寺（天正 7（1579）年建立）のあとに、達翁（四世）和尚が朝遊山宗関寺を再建する。
	文禄 2（1593）年頃～	城下の移転が始まる。
江戸	元禄 2（1689）年 7 月 11 日	水戸藩家老中山備中守信治等藩士によって、北条陸奥守氏照の百回忌法要を行ない、合せて梵鐘を鋳造し鐘楼堂を建立、宗関寺観音堂裏に墓石を建立する。
	元禄年中（1688～1703）	勢州今泉の人、鉄山無心（児玉氏が出家）が、八王子権現を再建（天正 6（1578）年、氏照が建立したというもの）その後、再び焼失し、現在のものは幕末再建という。
	弘化 3（1846）年～嘉永 5（1852）年	徳川幕府の代官江川太郎左衛門英龍が八王子地方に植林事業を実施、この時、城下郭部分に林道を開通、著しく遺構を破壊したと伝えられる。
明治	明治 25（1891）年	宗関寺が現在の地に移転される。この頃、西川家屋敷の西に築かれていた桝形がとりこわされる。
	明治 38（1904）年頃	日露戦争に関連して、城山の御林を伐り出す必要が生じ、城山登山口の道が開かれた。
大正	大正時代（1912～1926）	染谷幸三郎の尽力で、現在の宗関寺以西の道（幅 2 間 360cm）が開かれる。
	大正 8（1919）年秋	氏照の弟氏規の末裔である北条氏恭により、松木曲輪に八王子城趾の碑が建立される。
昭和	昭和初め	福善寺大悲閣が建立される。
		金子曲輪に関東大震災の慰霊塔が建立される。
	昭和 8（1933）年	山王台に南無妙法蓮華経の供養塔が建立される。
	昭和 25（1950）年頃	村の青年団等により、金子曲輪の東側斜面に梅林が植栽される。
	昭和 31（1956）年頃	八王子城址キャンプ場が開設される。この頃宗関寺以西の道路が拡張される。
	昭和 33（1958）年	武蔵野郷土館が根津美術館の奥田直栄氏に依頼して、山頂の八王子神社社殿前の石段下の発掘調査を行い、明の染付や瀬戸の天目、茶臼、鉛の銃丸等が発掘される。
	昭和 37（1942）年～	中央自動車道の工事が開始され、昭和 42（1967）年 12 月に調布-八王子間、昭和 43（1968）年 12 月に八王子-相模湖間が開通した。
	昭和 40（1965）年 5 月	割烹梅幸建設のため福善寺南上の平場を約 3,000 ㎡、深 80cm にわたり造成。調度品金具、ものさしの炭化片等が発見され（市郷土資料館及び元八王子中学校に保管）、その後、工事は中止となった。
	昭和 40（1965）年 11 月	東京造形大学運動場を造成中に、曲輪遺構が発掘されるが平場等は消失した。
	昭和 41（1966）年 5 月	東京営林署国有林伐採のため道路拡張、御主殿跡下の橋基礎石垣等を破損。この後、①天守閣跡、②駒冷し跡、③千畳敷跡、の石柱標識塔を立てる。
	昭和 43（1968）年 3 月	都立八王子霊園についての伺書により地元の意見を諮問される。4 月以降工事に着手した。
	昭和 43（1968）年	東京造形大学増築工事が始まる。
	昭和 46（1971）年 3 月	八王子城址キャンプ場が地主に払い下げられる。
	昭和 46（1971）年 8 月	宗教法人が寺院及び墓地を建設するため北の新田と呼ばれている平場約 2,000 ㎡を造成、工事中止等の経緯があり、昭和 49（1974）年度に東京都が買収した。
	昭和 49（1974）年 12 月	東京造形大学第 3 次増築工事の申請に対し、昭和 51（1976）年、市教育委員会が事前に発掘調査を実施した。その結果、戦国期の遺構が確認されなかったことから、4 号館が建築される。
平成	平成 15（2003）年 11 月～	圏央道八王子城跡トンネル掘削工事が始まり、平成 19（2007）年 6 月に工事が完了し、中央自動車道と接続した。
	平成 23（2012）年	東京造形大学 4 号館跡地に八王子城跡ガイダンス施設建設が始まり、平成 24（2013）年 10 月 20 日に開館する。



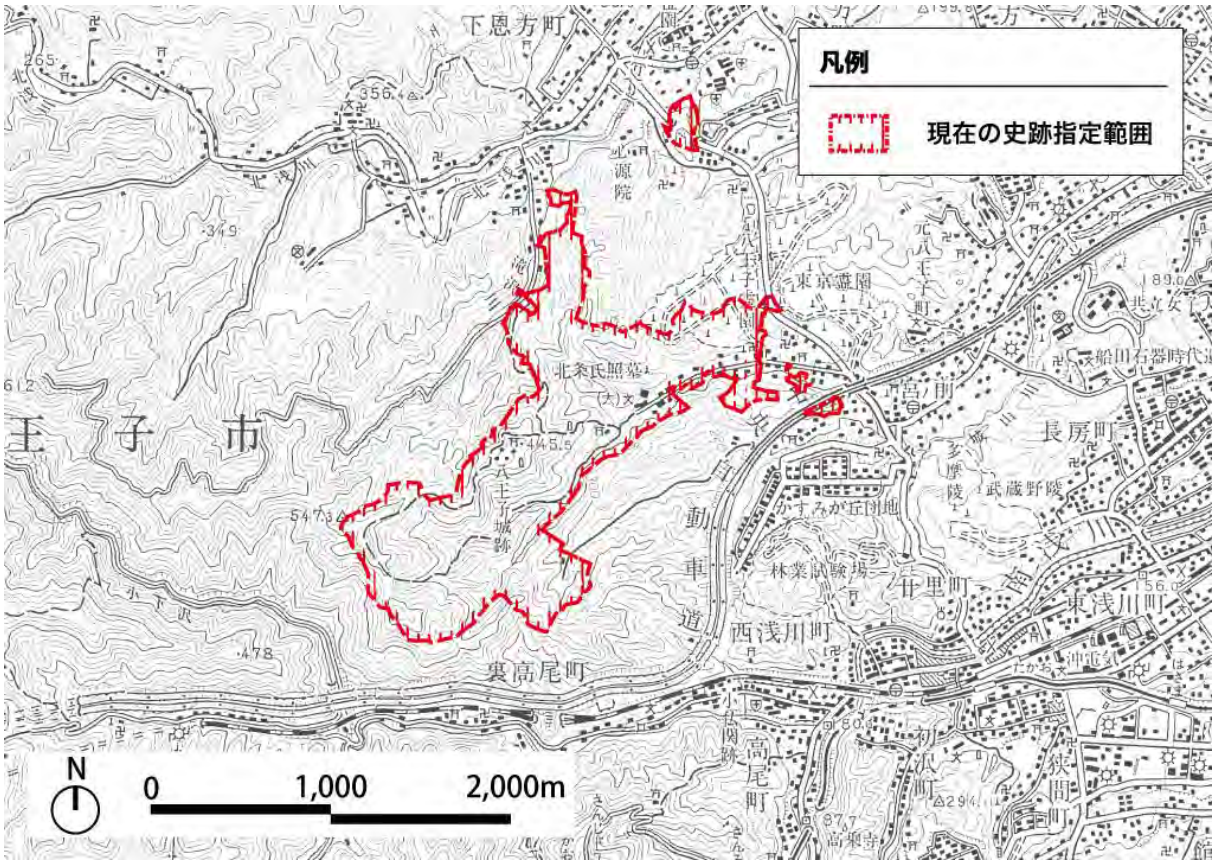
▲図表 24　明治 40（1907）年の八王子城跡及び周辺



▲図表 25　大正 12（1923）年の八王子城跡及び周辺



▲図表 26　昭和 47（1972）年の八王子城跡及び周辺



▲図表 27　平成 2（1990）年の八王子城跡及び周辺

ウ　八王子城跡の範囲と構造

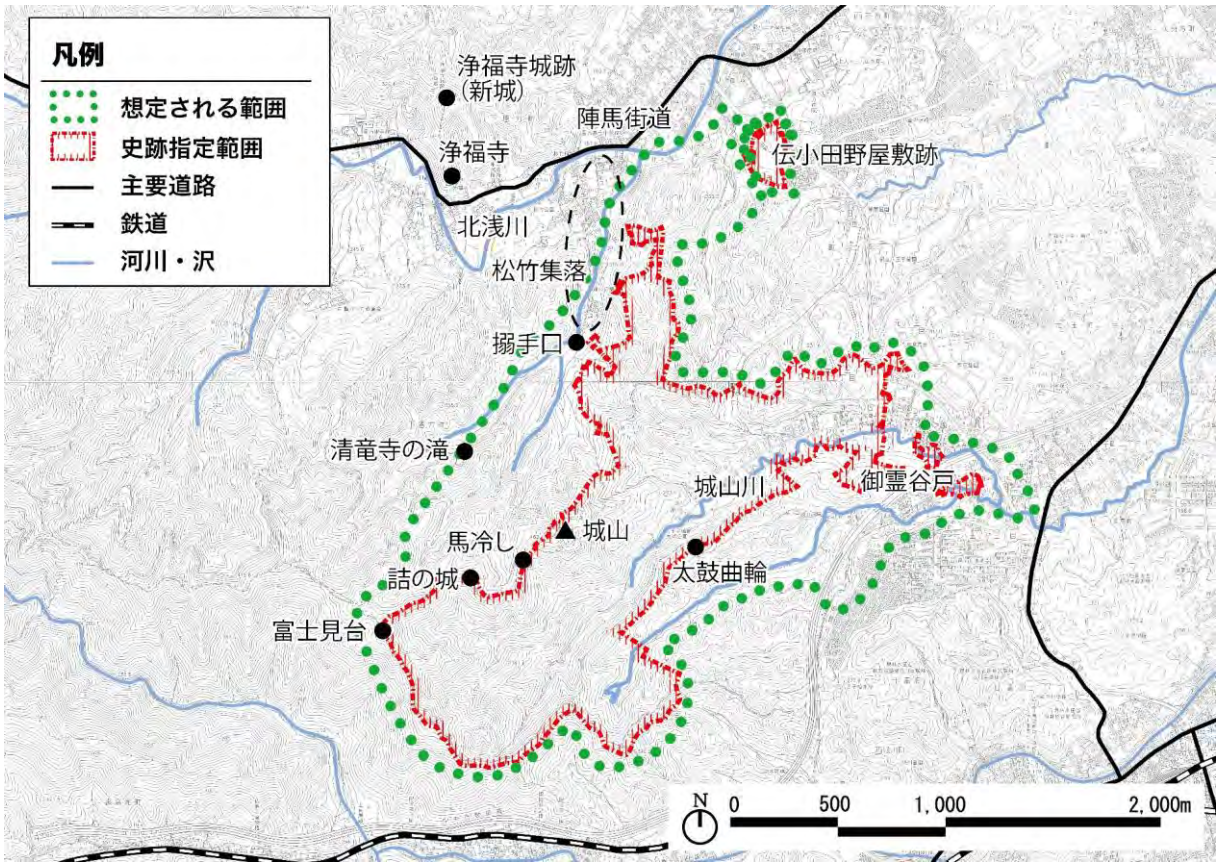
【八王子城跡の範囲】

八王子城跡は東京都の西郊、八王子市元八王子町三丁目および下恩方町、西寺方町にまたがる広大な山地に存在し、関東山地と丘陵部の接点に占地しており、独立峰のようにそびえる標高 460m の城山とその山麓、および城山川に沿う谷戸部分という変化に富んだ地形を巧みに利用して築城されている。

現在想定されている八王子城の範囲は、城山を中心にして東西に延びている。城山の西方は、通称馬冷しと呼ばれる切通し（標高 400m）を渡って尾根道に登ると石垣を部分的に残す詰城があり、その先は石盤を切り取った深い堀切があり、ここまでが範囲と思われる。この先に富士見台（大嵐山 547m）と呼ばれている見晴らしのすぐれたところがあり、さらに尾根を進むと堂所山（721m）を通り陣馬山に至る。

本丸から詰城に至る北面は、清竜寺の滝等がある深い谷が入りくむ滝の沢と呼ばれる要害の地域である。滝の沢の谷口には、松竹集落が広がり、ここが搦手口（からめてぐち）とされている。さらに、北の北浅川、陣馬街道を渡った地に浄福寺があり、この北山が浄福寺城（新城城 356m）である。この東側には、氏照の家臣であったと伝えられる小田野源太左衛門の屋敷跡がある。

城山の東面は、山麓に至るまでの急斜面に数段の削平された平場と土塁等が見られ、特に麓の部分には曲輪が連続して広がっている。御霊谷川を渡った東のほぼ南北に走る尾根には、太鼓曲輪をはじめ、5 ヵ所の切り堀群と石垣群が見られ、ここまでが東の範囲と思われる。この東が御霊谷戸であり、前田利家勢が攻め込んだと伝えられるところである。



▲図表 28　八王子城跡の範囲

【八王子城跡の構造】

城主北条氏照が構想していた壮大な城郭は未完成であったと推測されるが、残された遺構や地形的な特徴、慶安元（1648）年に描かれた八王子城古図（図表 30、これ以降「古図」と表記）から八王子城の縄張りを考えると、城山山頂を中心とする「要害エリア」、御主殿跡やアシダ曲輪等の館跡の存在する「居館エリア」、城下に相当する「根小屋エリア」、城山川を隔てた尾根上に配置された「太鼓曲輪エリア」とその南側の谷を占める「大手口エリア」、北方の下恩方町にある「搦手口エリア」などにエリアを分けることができる（図表 29）。

①要害エリア

城山山頂に設けられた本丸を中心に、松木曲輪、小宮曲輪等の曲輪が配され、その周辺に腰曲輪が幾重にも取り付く構造となっている。西方は無名曲輪から尾根道を経て詰城と呼ばれる曲輪に至り、この西方下の堀切が八王子城の西限と考えられている。北方は小宮曲輪から延びる尾根上に高丸等の曲輪が配され、東側に延びる尾根上には柵門跡、金子曲輪さらには山王台と呼ばれる曲輪が設けられている。

②居館エリア

城主である北条氏照の居館跡と考えられている曲輪を中心としたエリアで、山頂から南東方向へ約 200m 下った部分に設けられている。御主殿跡は東西約 100m、南北約 50m の削平造成地で、東および南側を土塁と石垣で囲まれ、北東部は枡形虎口となり、曳橋跡へ下っている。この曳橋の橋台部は城山川を挟んだ対岸に確認され、城山川を渡って対岸の太鼓曲輪エリアへ至っている。御主殿跡の東方はアシダ曲輪と呼ばれる土塁に囲まれた曲輪が数段続いており、居館や倉庫の存在が想定されている。

③根小屋エリア

城下に相当するものと考えられ、家臣団の屋敷や寺院の存在が予測されており、現段階では区割状の遺構や掘立柱建物跡などが確認されている。御主殿跡の本格的な発掘調査が実施されるまでは、調査の手が継続的に最も多く入れられたエリアである。

④太鼓曲輪エリア

居館エリア南方の城山川を挟んだエリアに展開する曲輪群で、尾根上には堀切で分断された細長い曲輪群が連なり、中腹には曳橋から続く古道の延びる平坦面が連続している。

⑤大手口エリア

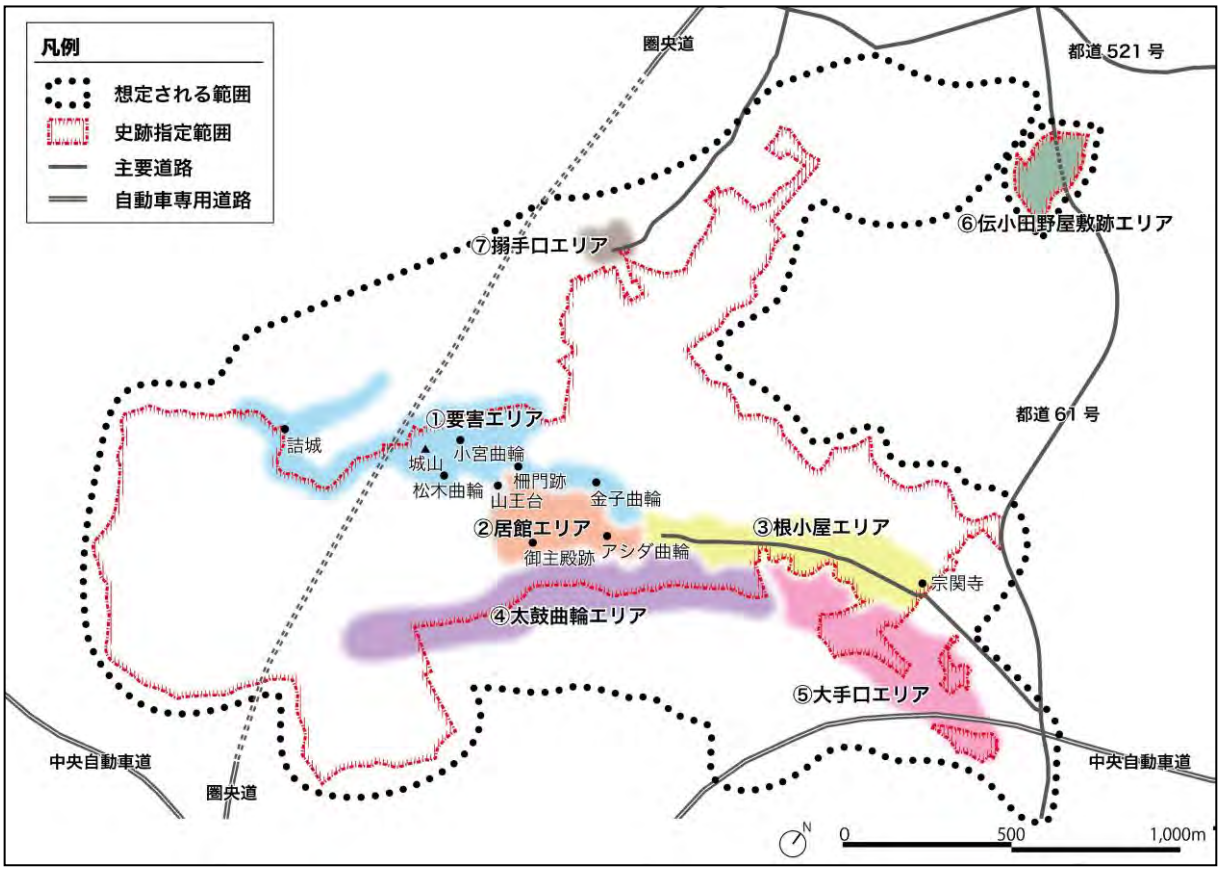
太鼓曲輪から北方に延びる丘陵の東端とその南側の台地に位置する。試掘調査により、八王子城の南側の備えとしての防御上の施設の存在が確認されている。

⑥伝小田野屋敷跡エリア

八王子城城主北条氏照の家臣である小田野源太左衛門の屋敷跡である。史跡の追加指定以前に重機による造成行為が行われ、一部破損が見られるが、数段の腰曲輪や枡形状の遺構、空堀などその形状をよく残している。

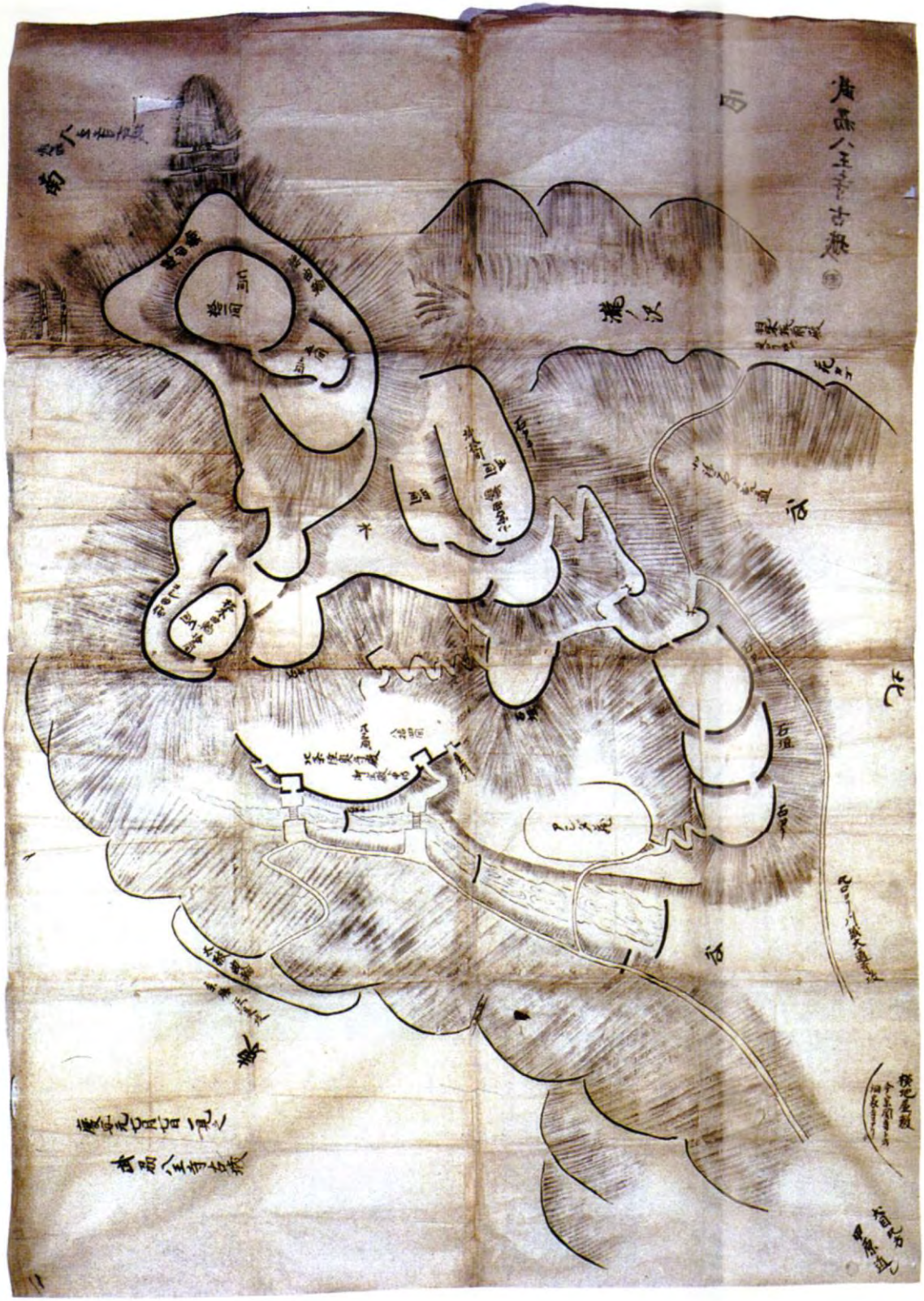
⑦搦手口エリア

下恩方町側の清竜寺の滝、および滝の沢等の谷が集まり、北に開ける地域が松竹であり、一般的には搦手口として知られている。恩方村誌によれば、北浅川の南部は、ことごとく城内に属し、北部が城下として記されている。



▲図表 29　八王子城跡の範囲と構造　　＊範囲のうち、主要な機能を有する部分をエリアとして図示

＊拡大図は P187 を参照



▲図表 30　慶安元（1648）年に描かれた八王子城古図（石井義兼氏蔵）

【八王子城跡の主な縄張り】

八王子城跡の中心をなした要害エリアと居館エリア、太鼓曲輪エリアについては、個別の曲輪などについて整理する（図表 31、32）。

①本丸跡

本丸跡は要害エリアの最高地に位置する平坦地で、標高 460m 付近に位置する。

城の中心で、籠城の際最も重要な曲輪となる。平地が広くないことから、大きな建物はなかったと考えられる。横地監物吉信が守備していた。

②小宮曲輪

要害エリアの本丸跡の北西側に位置する曲輪で、古図に「小宮曲輪」と記載されている。標高 445m 付近に位置し、本丸跡との標高差は約 15m である。

平坦地の東側には蔵王権現の小祠があり、社殿の背後には杉の植林地が続き、ヤタケと呼ばれる篠竹も見られる。

三の丸とも一庵曲輪とも呼ばれていた。狩野一庵が守備していたが、上杉景勝軍に落された。

③松木曲輪

要害エリアの本丸跡の北東側に位置する曲輪で、古図に「松木曲輪」と記載されている。松木曲輪は、標高 440m 付近に位置し、本丸跡との標高差は約 20m である。

中の丸とも二の丸とも呼ばれていた。中山勘解由家範が守備していたが、前田利家軍と奮戦したが防ぎきれなかった。

近くに「坎井（かんせい）」と呼ばれる井戸がある。井戸底は松材で枠が組まれ、その上に石が積まれている。

④無名の曲輪

無名の曲輪は、本丸跡の西側に位置する腰曲輪で、史資料に記載がないことから、無名の曲輪と呼ばれている。

⑤馬冷し（こまびや）

馬冷しは、本丸跡から詰城に至る尾根上にある堀切のことである。

⑥詰城

詰城は本丸跡の西方に位置する曲輪で、標高は 478m、八王子城の西限である。大天守ともいわれ、周囲には石垣が、西側には深い堀切がある。詰城に至る急斜面には石塁が見られる。また、詰城から北西に延びる尾根の西斜面には防御壁の要と考えられる石垣が続いている。

本丸の背後を警戒するほかに、本丸が敵の攻撃を支え切れなくなったとき、最後の拠点となったと考えられる。

⑦高丸

高丸は、小宮曲輪の北口に位置する腰曲輪のことである。

⑧柵門跡

金子曲輪から本丸跡へ上る標高 370m付近に柵門跡はある。現在遺構はなく、当時の姿を偲ぶものは残っていない。この地点から北側に行くと搦手口へと至る。金子曲輪から続く北斜面には長さ 35.8m にわたって石垣が残存している。高さは 3.1m、犬走りを挟んで 2 段で構築されている。

⑨金子曲輪

根小屋エリアから要害エリアに至る地点に位置する曲輪で、金子三郎右衛門家重が守備していた。標高 280m～305mの間は尾根をひな壇状に造成し、敵の侵入を防ぐ工夫がなされている。上部の 310～320mの間は細長い平坦地になっており、北側斜面には一部石垣が残存している。

⑩アシダ曲輪

居館エリアの入口、御主殿跡の北東側に位置する曲輪である。古図に「アシダ蔵」と記載されていることから、「アシダ曲輪」と呼称されている。

土塁に囲まれた平坦地が 3 段確認できるが、最上段の曲輪については平成 25 年 1 月～2 月に確認調査を実施している。ここは、昭和 40（1965）年 5 月に割烹旅館の建設工事が着工され、ブルドーザーにより一部遺構が破壊されたとされていた。その際の採集品の分布では、東側では生活用具が多く、西側から炭化した穀物が多く出土したことから、東側には居館、西側には穀物倉庫があったといわれていた。

平成 25 年の調査地点は東側に当たるが、確認調査の結果、硬化面や礎石、土坑、ピット等が断片的ではあるが検出された。出土遺物は、国産の天目茶碗、茶入、掛花生、中国磁器、雲母片などであった。

⑪御主殿跡

この曲輪は八王子城の中心ともいえる所で、古図に「北条陸奥守殿御主殿」と記載されている。城主北条氏照の居館があったところであり、御主殿跡と呼ばれている。

平成 4・5 年度、平成 25 年度に実施した発掘調査では、「主殿」「会所」と推定される大型の礎石建物跡や、池を中心とする庭園、敷石通路、水路等の遺構が検出されている。

⑫橋台跡

橋台部は、御主殿跡と城山川を挟んだ対岸に位置する古道の斜面に位置する石垣で、古図には曳橋が記載されている。

昭和 63 年度に実施した発掘調査では、橋台部を支える石垣や天端の礫の一部が検出されている。

⑬大手門跡

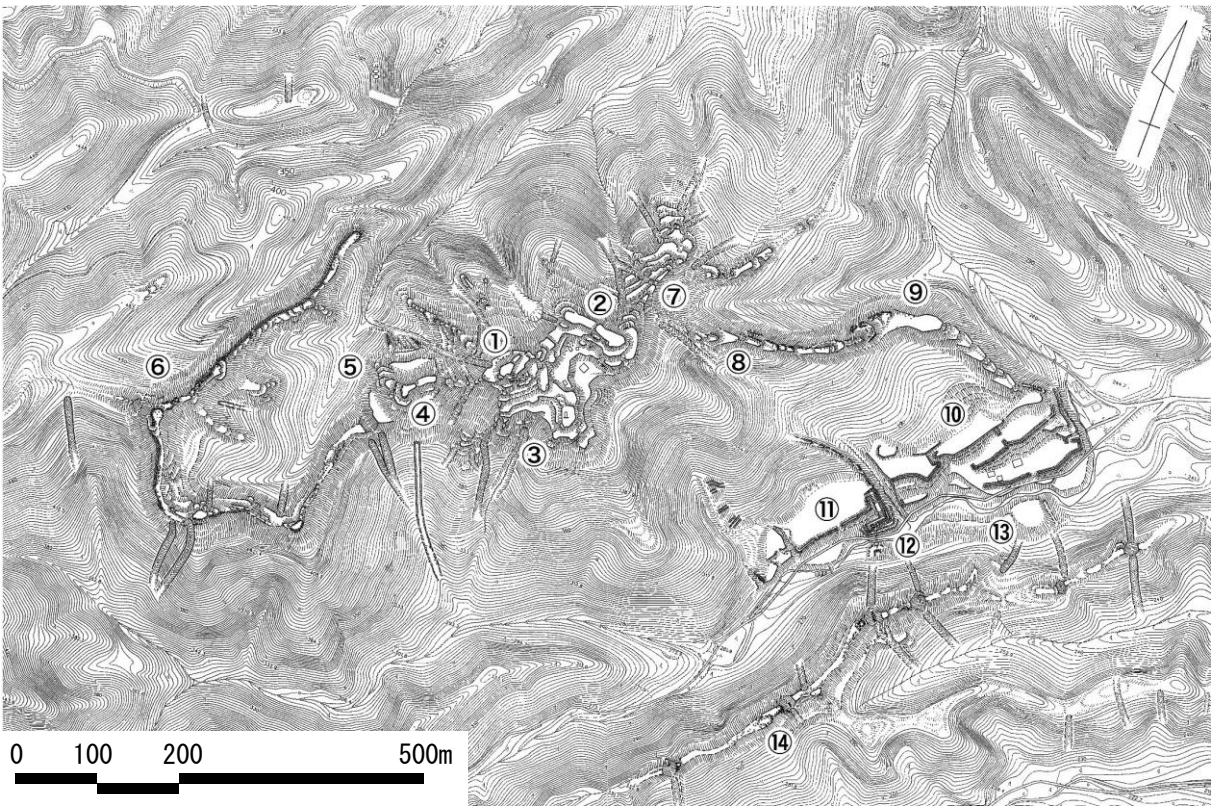
大手門跡は、アシダ曲輪から城山川を挟んだ対岸に位置する場所に位置する門跡遺構が検出された曲輪で、南北に延びる土塁と太鼓曲輪に続く急斜面との間という要所に位置している門ということで、大手門と呼ばれている。

昭和 63 年度に実施した発掘調査では、門の礎石や張石遺構、土塁の北端に位置する石垣等が検出されている。

⑭太鼓曲輪

太鼓曲輪は、居館エリアの南東を流れる城山川の対岸に位置する曲輪で、古図に「太鼓曲輪」と記載されている。

太鼓曲輪は、尾根上を 5 つの堀切で断った細長い曲輪群で、斜面に一部石垣が残されている。



No.	名称
①	本丸跡
②	小宮曲輪
③	松木曲輪
④	無名の曲輪
⑤	馬冷し
⑥	詰城
⑦	高丸

No.	名称
⑧	柵門跡
⑨	金子曲輪
⑩	アシダ曲輪
⑪	御主殿跡
⑫	橋台跡
⑬	大手門跡
⑭	太鼓曲輪

▲図表 31　八王子城の縄張り

【出典：『東京都の中世城館（主要城館編）』（平成 18 年　東京都教育委員会）に加筆】